

入 賞

ペンネーム 慈昭 [奈良県/67歳] テーマ「ご縁」

昭和20年、大阪の大空襲に遇って、命からがら逃げた父と母。その時私は1歳であった。縁故を頼って奈良の地へ。みかん箱をテーブルにしての長屋生活が始まった。懸命の暮しにも、4人のこどもに恵まれた。父母は健気で優しかった。私たち4人のこどもを大切に育ててくれた。父母は、子どもをどこかへ遊びに連れて行ってやりたい。が、暇もなしお金もなし。そこで、お寺参りが一番!と思った。父は浄土真宗の家で生まれ育った人だ。幸に近くに浄土真宗のお寺があり、毎月1日と15日に、ご住職様がお説法をしておられた。戦時中もご法座を欠かしたことがないという熱心な老僧様。若院様も日曜学校を開設しておられた。

我家には逆立ちしても1円のお賽銭もなかったが、父は上の子2人の手を引き、母は弟をおんぶし、妹の手をとり、恐る恐るそのお寺の門を初めてくぐった。老僧は1家6人を本当にこやかに「ようこそようこそお参りに来てくれた。」と、丸ごと受け入れてくださった。父母は、老僧様若院様の暖かさにどれほど慰められた事でしょう。こうして、広い境内、大きな本堂へお参りさせていただくのが楽しみとなった。私たち4人兄弟は年々大きくなり、日曜学校でも伸びやかに過ごさせてもらった。

ある日「父親ヲご本山から表彰スル」という御住職様から推薦話を持って来てくださった。「エーッ!そんな!私は見での通り、その日暮し。何にもお寺に尽くしてない!そんな大それた価値など、これっぽっちもない!」と即、退いた父。「いやいや、何と言っても4人のお子さんを赤ちゃんの時からズーッとお寺に通わせてくれとんや。そして、家族中でお説法聞きに来てくれる家やさかい。それが一番立派な理由なんや。うちのお寺へ家中で参ってくれるところはここだけや。」とニコニコ御住職様。「御礼申すのはこちら」と、涙を流さんばかりに恐れ入りながら、深々と頭を下げてご辞退申した父であった。 合掌